慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦後日本社会のアイデンティティ論： 重層的アイデンティティに向けて
Sub Title	The Point at 'identity' in Postwar Japanese Society: Towards the multi-layered identities
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2004
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.77, No.1 (2004. 1) ,p.77- 102
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川合隆男教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20040128-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦後日本社会のアイデンティティ論

――重層的アイデンティティに向けて――

有末賢

一　はじめに
二　アイデンティティ論の登場
　1　戦後社会意識の転換点
　2　社会運動と挫折
　3　アイデンティティの種類と類型
三　自我と他者関係
　1　「自己実現」という物語
　2　他者関係と役割の重層性
　3　関係性の喪失と危機
　4　「再生」の物語
四　アイデンティティの迷路
　1　自己―他者の境界のあいまいさ
　2　多重的自己と自己選択の複数性
　3　知識・情報と意欲・関心
五　重層的アイデンティティと社会的属性
　1　エスニシティ・ジェンダー・年齢の重層性
　2　職業・労働・家族・地域の重層性
　3　国家・環境・グローバルの重層性
六　戦後日本社会の市民意識――まとめにかえて――

一　はじめに

社会学は、今、「知の困難」の状態の只中にいる。現代社会を取り巻く多くの環境変化の中で、社会学は今までの方法や分析の道具を使って果たして二一世紀まで生き延びられるのだろうか？

筆者は、二〇〇〇年一月号の『三色旗』（慶應義塾大学通信教育部補助教材）において、「現代社会学と知の地平」という特集を組んで、他の社会学研究者との「対談」を行った後に、「現代社会と社会学の『知の困難』」という文章を書いている。例えば、次のように「知の困難」について記述している。

「さらに本質的な問題として、社会学の基本的な諸概念、例えば、行為、関係、集団、制度、構造などが果たして『現代社会』をどこまで分析し得る概念なのだろうか。個人の行為が基礎にあって、相互作用や関係性によって、集団を形成し、集団は社会制度や全体社会の側からは組織や社会構造として理解される。このような社会学の理解の仕方は、それなりの論理を伴った筋道の通った考え方ではある。しかし、一方で個人の行為を基本的単位としながら、個人の総和以上の「社会」の側から個人をとらえる視点が混在しているのも事実である。家族や学校集団、職場の集団などいわゆる「小社会」が機能していた今までの社会状況の中では、このような連続戦上のとらえかたにも一定のリアリティがあった。しかし、個人と個人をつなぐネットワークばかりが肥大化しつつある今日の社会状況の中で、今後二一世紀の時代に『社会学』の基礎概念は果たして有効性を持っているのだろうか？」[1]

本稿においては、このような問題意識に立った上で、筆者が今まで検討してきた「戦後日本社会の価値意識の変化――余暇と自己実現を中心に――」[2]（『法学研究』第六七第一二号、一九九四年一二月）及び「再帰性と自己決定権――ポストモダンと日本社会――」[3]（田中宏・大石裕編『政治・社会理論のフロンティア（慶應義塾大学法学部政治学科開設百年記念出版）』所収、慶應義塾大学出版会、一九九八年）の延長線上に位置している。

本稿の主題である社会学用語としての「アイデンティティ」概念は、今かなり広範囲な概念として使われている。「再帰性と自己決定権――ポストモダンと日本社会――」において、私は、次のように記している。

「それに対して、自己の完結性を放棄し、自己＝フィクションとしてのアイデンティティを求めていく場合には、「自己決定権」という概念に一定のリアリティが取り込まれる。つまり、ギデンズの用語を使えば、「再帰的自己自覚的達成課題」を決定していくということになる。そこには、もはや単一の自己アイデンティティ像はなく、それぞれの課題ごとにジェンダー・アイデンティティ、セクシュアル・アイデンティティ、エスニック・アイデンティティ、ナショナル・アイデンティティ、レイシャル・アイデンティティ、コミュニティ・アイデンティティ、カルチュラル・アイデンティティなどなどが重層的、複合的に再構成されるものと考えられる。(4)」

しかし、戦後日本社会におけるアイデンティティ論はモダニティとアイデンティティとの逆説的な関係、つまり、再帰性によって、どもまでも自己アイデンティティが確定されない、「本当の自分」を求めて、オールタナティヴな（もう一つの）アイデンティティを模索するという「果てしなき旅」へと旅立つことになる。

そこで、本稿では何故、戦後日本社会ではアイデンティティが拡散的となってきたのか、その現象を社会学的な「自己と他者」「関係性」「社会的属性」などの基本的概念を駆使して分析していきたいと考えている。さらに、重層的アイデンティティというポストモダンの状況における、市民意識（シティズンシップ）の問題として再構成していきたいと目論んでいる。

二　アイデンティティ論の登場

1　戦後社会意識の転換点

アイデンティティ（idenntity）と言う用語は、精神分析・社会心理学者のE・H・エリクソンの中心概念の一つであり、「同一性」または「自己同一性」と訳されている。エリクソンによるアイデンティティ概念は、発達心理学の段階的な位置付けにおいて、特に青年期にアイデンティティの確立かアイデンティティの危機（拡散）かという課題が投げかけられている、という理解である。

このアイデンティティなる用語は、日本で出版されている日本人による『社会学辞典』などにおいては、いずれも項目として挙がっており、詳細な記述と文献案内がなされている。[5] ところが、イギリスで発行され英語文化圏で広く読まれてきたペンギン・ブックスの『社会学辞典』（The Penguin Dictionary of Sociology）やフランス社会学界で定評のある『ラルース社会学事典』（Dictionnaire de la sociologie Larousse）においては、アイデンティティという用語は、辞典の中には項目として長らく出てきていなかった。[6] このことは、何を意味しているのであろうか？

もともとのエリクソンによるアイデンティティ概念の提起に対して、日本社会の反応はある意味で「社会意識としてのアイデンティティ」として集合的に理解してきたように思われるのである。戦後日本社会を論じていく際には、一九七三年のオイルショックによって、高度経済成長が終了する時点は、大きな転換点になっている。前稿でも指摘したが、いわゆる「物の豊かさ」か「心の豊かさ」か、どちらに重きをおいて生活をしてゆくのかと言う質問に対して、一九七〇年代後半から両者の関係が拮抗し、そしてやがて八〇年代以降は、「心の豊かさ」が「物の豊かさ」を凌駕していく傾向がはっきり示されている。[7] その意味で、オイルショック以後の日本社会において、精神的な意味での「自己同一性」に危機が訪れて、「心の豊かさ」とは一体何なのか、模索され始めた時であった、と言えるのではないだろうか。そして、もう一つは七三年のオイルショック以前に用意されていた、一九六八年を中心とした「社会運動」「学生運動」の経験とその後の「挫折」の意識であった。

2　社会運動と挫折

一九六八～六九年頃の、世界的な学生運動や社会運動についてはさまざまな解釈や分析があるが、戦後日本社会にとっては、一九六〇年の「日米安全保障条約」（安保）締結に伴う「安保反対」の大衆運動以来の大きな運動の盛り上がりであった。いわゆる「全共闘世代」と言われる「団塊の世代」が、大学生になって若者の「異議申し立て」や過激な行動が目立つようになったわけである。

このような社会運動が、その後の住民運動や公害反対運動、反核運動、環境運動などに引き継がれていく面ももちろん見られるし、ライフスタイルとしても伝統にとらわれない自由で革新的な生き方として、その後に続く人々に継承されている面も存在してはいる。

しかし、運動の「盛り上がり」はその後、必ず汐が引くように退潮に転じ、組織の分裂やいわゆる「内ゲバ」や大衆の支持を得られない過激派の行動が目立つようになると、一般的には「学生運動とは何だったのか？」という「挫折」と「反省」の時期に入っていくことになる。一九七〇年代は、このような意味でも戦後日本社会全体が「アイデンティティの危機」を経験していたとも言えるのである。欧米社会に比べると、階級文化やローカル文化、エスニシティなどの要素が比較的弱い点も、アイデンティティを世代全体で集合的に受け止める傾向が見られる要因であるかもしれない。そこで、これからアイデンティティ論を検証していく上で、アイデンティティの種類と類型について次に見ていくことにしたい。

3　アイデンティティの種類と類型

エリクソンの定義だけではなく、戦後日本社会を考える上で有効な概念としてアイデンティティを見ていきた

い。まず、「自己同一性」と訳される「自己」についての分類としては、（1）関係的自己と（2）達成的自己の分類が存在している。つまり、（1）関係的自己とは、自己を他者との関係性の中で「関係的なる存在」として位置付ける見方である。

それに対して（2）達成的自己とは、自分自身が後天的に獲得し、達成していく業績やその過程（プロセス）に自己同一性（アイデンティティ）を見いだしていくという見方である。

もちろん、現実の「自己」は関係的自己でもあるし、達成的自己でもあるわけであり、純粋に二つの理念型に当てはまっているわけではなく、綯い交ぜになって、あるときは使い分けてアイデンティティを保っているとも言えるだろう。そして、第二の種類として、ポジティヴ・アイデンティティ（肯定的アイデンティティ）とネガティヴ・アイデンティティ（否定的アイデンティティ）の分類が存在している。肯定的アイデンティティとは、「こうなりたい自分」「理想とする自分」であり、人格的にはモデル・パーソン、すなわち「理想の人」に近づきたいという方向性を示している。それに対して、否定的アイデンティティとは、「こうなりたくない自分」「反面教師」「自己の否定面」など、「裏返し」としてのアイデンティティを示している。

このように、関係的自己と達成的自己の両方が、肯定的か否定的かいずれかのアイデンティティを模索しながら、自己同一性を獲得しようとしているのである。

三　自我と他者関係

1　「自己実現」という物語

戦後の高度経済成長期には、日本人の全体が一種の「底上げ」状態、あるいは総中流化を経験してきた。もち

ろん、一部には階層の下降移動もあったし、経済成長下での「貧困」も存在していた。しかし、社会意識として「アイデンティティの危機」が流行してくるのは、やはり高度経済成長が終了して低成長下に入ってくる一九七〇年代後半あたりからである。そして、私の解釈では、達成的自己と否定的アイデンティティの組み合わせから始まって、次第に肯定的アイデンティティとしての「自己実現」へ収斂してきたように思われる。六〇年代後半からの「自己否定」の論理は、その後の運動の挫折において、否定的アイデンティティの「虚しさ」「空虚さ」を露呈していった。しかし、一言付け加えておかなければならないのは、「自己否定」の契機は、単に時代の気分であっただけではなく、自己省察や内省を通して、「これまでの自己ではない」自分、否定の契機を通して、歴史や社会の全体像に迫っていくという方法論も内包していたものであった。(8)

この達成的自己の内容についても、高度成長期からの延長では「物の豊かさ」の追求が主要な達成課題であった。つまり、収入、地位、財産などの目に見える「幸せ」が自己実現に大きく影響していたわけである。ところが、七〇年代後半あたりから、「心の豊かさ」という課題が登場してくると、達成的自己だけでは行き詰まってきて、関係的自己による肯定的アイデンティティが要求されるようになってきたのである。

関係的自己は、他者との関係性の中から、自己を見いだしていくプロセスである。家族関係、友人関係、恋愛関係、同僚関係、コミュニティ関係など、まずはミクロな人間関係から出発する場合が多い。「自己実現」は、達成的自己ばかりではなく、関係的自己においても発達段階や役割の移行などにおいて、アイデンティティの危機を経験し、自己実現が目指されてもいる。「自己実現」の特徴は、自己のストーリーが何らかの形で「実現する」という物語を作っていくという点である。「仕事」「職業」においてでも良いし、「結婚」「出産」「家族」においてでも良いのだが、自分自身の理想（モデル・ストーリー）が「実現（具現化）」していくことが重要なポイントである。

物語は、往々にして典型的ストーリー、サクセス・ストーリーあるいはマニュアル化した「ハウツー」を生産、再生産していくことが多い。「自己実現」という課題は、現在でも就職活動を控えた大学生たちに、ある種の「圧力」を与えつづけている。一九八〇年代以降、若者たちの「転職」希望が増加し、バブル期には転職が一気に一般化したのも「自己実現」の物語が背後で大きな影響力を持っていたと考えられるのである。バブル崩壊後は、確かに転職はかなりのリスクを伴うため、希望通りには実現していない状態ではあるが、潜在的には転職希望は増加しつづけているものと思われる。また、就職試験などにおける自己ピーアール、プレゼンテーションの重要性なども「自己実現」という物語の維持、再生産に寄与しているのではないかと思われるのである。

2　他者関係と役割の重層性

アイデンティティは他者関係の中で形成され、変容し、また危機を迎えることもある。自我と他者の問題はG・H・ミード以来、古くから研究されてきた。シンボリック相互行為論に基づいて構築主義的な「自己論」を展開している片桐雅隆は、『自己と『語り』の社会学』（二〇〇〇年）において、次のように述べている。

「役割アイデンティティ論は役割がシンボルであることから出発し、そのセイリアンス論は、役割アイデンティティの獲得のあり方、その多元的な使用のあり方を指摘した。われわれはそのシンボル論の視点を基本的に共有しつつも、役割（カテゴリー）による相互行為や自己の一方的な規定には疑問を投げかけた。見てきたように、役割アイデンティティは、独我的で自閉的なものではなく相互行為に開かれており、それは相互行為の中で使用されるとともに、その使用のあり方は、曖昧性や非対称的な特徴をもつ交渉性を伴っている。そして、相互行為が、曖昧で非対称的なものである限り、役割アイデンティティの獲得のあり方も、そのような特徴をはらむ試行性を免れない。そのことは、指摘したように、乳幼児期における役割アイデンティティの原初的な獲得期においても例外ではない。個々人がもつ自己あるいは

役割アイデンティティとは、そのような試行性の出来事の積み重なりの所産であり、それが一人一人のもつ個性と呼ばれるものである。したがって、自己は、自他関係の認知地図としての役割（カテゴリー）に位置付けられることによって構築されるとしても、自己の構築は、他者によって付与される役割（カテゴリー）との永続的なズレの蓄積を伴っている。[9]」

また、次のようにも述べている。

「しかし、また一方で、現実を構築し、トークにおいて用いられる自他関係の認知地図としての役割（カテゴリー）や、その中に位置付けられた自己（あるいは役割アイデンティティ）は、相互行為の中で試行的に維持され、構築される。ミードは、自らの働きかけへの他者の反応を予期し、それに基づいて自己のあり方を調整する過程を役割取得と定義したが、自己の構築は、そのような役割取得の過程と相補的、循環的であった。

役割取得は、役割（カテゴリー）の獲得やそのことによる自己の構築によって、より予期が可能なものとなり、また、役割取得は、役割（カテゴリー）や自己をより安定したものとする。ミードは、自己の構築、役割取得、制度（社会）の構築を同時的なものと考えた。換言すれば、自己あるいは役割アイデンティティの構築は、自他関係の認知地図としての役割（カテゴリー）の獲得と不可分であるし、また同時に、相互行為の構築とも切り離すことはできない。[10]自己と社会とは、そのような意味で相互に規定しあう再帰的な関係にある。」

片桐の主張する役割（カテゴリー）の取得を通して、自己のアイデンティティが構築されていくというのは、もっともな説である。しかし、ゴッフマンによる、「役割距離」や「役割演技」などの諸概念も重ね合わせてみると、役割（カテゴリー）の重層的な関係が存在しているのである。自己にとって、支配的な役割（カテゴリー）とは何で、従属的な役割は何か？　複数の役割（カテゴリー）を場面場面によって使い分ける自己とは何なのか？　また関係性による役割は他者との関係のあり方によって、変化するものでもある。

そうであるならば、自己のアイデンティティにとって、関係性の「喪失」という事態が最も危機的な状態とし

て浮かび上がってくるのである。

3 関係性の喪失と危機

片桐の前著以降、さまざまな方向からの自己論、「自己と社会」についての著作が出版されている。「寛容の社会理論」という合理的選択理論、社会秩序問題からアプローチしている数土直紀『理解できない他者と理解されない自己』[11]（二〇〇一年）、家族療法や物語論、構築主義からアプローチされている浅野智彦『自己への物語論的接近――家族療法から社会学へ――』[12]（二〇〇一年）、想起や記憶、集合的記憶や集合的過去などの問題も視野に入れている片桐雅隆『過去と記憶の社会学――自己論からの展開――』[13]（二〇〇三年）、自己と他者と〈間〉の社会理論を目指す大著、西原和久『自己と社会――現象学の社会理論と〈発生社会学〉――』[14]（二〇〇三年）など「自我と他者関係」についての文献は枚挙に遑が無いほどである。

どの文献でも、関係性や役割（カテゴリー）の複数性から、自己の物語を構築していく観点はほぼ論じられている。浅野の『自己への物語論的接近』においては、家族療法などから、精神的「病」の語りに注目し、カウンセリングやセルフ・ヘルプ・グループ（自助グループ）の活動などにも言及されてはいる。

しかし、アイデンティティの危機として最も重要な契機は、関係性の変容や役割距離や役割演技ではなくて、むしろ「関係性の喪失」であることは間違いないのである。例えば、親密な関係にある家族との死別、恋人の喪失（失恋）、離婚など、関係性の喪失は最も大きなダメージをもたらすとされている。関係性の「喪失」という消失点（vanishing point）からアイデンティティを再検討してみたい。

関係的自己は、何か特に葛藤や軋轢が生じたりしなければ、日常的には親密な関係の維持が実現されている。その場合には、おそらく「達成的自己」の課題がアイデンティティの目標として設定されることが多いものであ

る。「自己実現」や「本当の自分探し」などは基礎的な関係性が維持されているからこそ、自己の内的な欲求から「本当の自分」を求めて「実現」させようとするのである。

ところが、最も親密な関係性を、特に「突然喪う」という経験においては、自己の消滅、破壊にも等しい苦痛を味わうことになる。関係的自己とは、言うまでもないことだが、夫があっての妻であり、妻があっての夫、子どもがいての父親、母親である。このような関係性の喪失は、自己の存在基盤を根底から揺るがすことになる。

もちろん、「達成的自己」をアイデンティティの中核に置いている場合には、「失業」「解雇」「配置転換」などもアイデンティティを根底から覆す契機になる場合もあるだろう。しかし、一九七〇年代以降の日本社会において、低成長や不況が常態化していくと「達成的自己」の限界性にも人々は気づいてくるのである。しかし、関係的自己は長い人生設計において覚悟して移行していく場合は別だが、突然の「関係性の喪失」は最も強いアイデンティティの危機に立ち向かうことになるものと思われる。

4 「再生」の物語

関係性の喪失は、アイデンティティの喪失や拡散にもつながる大きな危機である。本人にとっては、身体、精神、仕事、人間関係などすべての領域において大きな打撃を被ることになる。そして、時間をかけて「喪失の悲哀」から立ち直っていく過程こそ、「再生の物語」が必要なのである。高度経済成長下の「成長の物語」は、言わば「大きな物語」であった。近代（モダン）の様相のもとで、国家の物語がそのまま個人レベルまで覆っているような壮大な物語であった、と言えるだろう。

そして、オイル・ショック以降の「心の豊かさ」を求める「自己実現」という物語は、国家や経済構造（マクロ）と関係的自己の私的世界（ミクロ）との間に位置している〈メソ〉レベル（中間レベル）の物語と位置付ける

ことができるだろう。したがって、自己実現は、達成的自己による（特に経済的な）「成功の物語」にも転化しえるし、また、私的な内面的充実の物語にもなりえるものである。

それに対して、関係性の「喪失」や「挫折」を経験した後の「再生の物語」「回復の物語」は、ミクロな意味での「自己物語」である。それは、いわゆるポスト・モダンの「小さな物語」であるのだが、本来は一人一人、異なっていなければならないはずの「小さな物語」は、逆に「癒し」やトラウマからの再生など、ある種の「定型物語」（モデル・ストーリー）も見られる。このように「再生の物語」でさえ、アイデンティティは個人的なものから社会意識的なものへと広がりを見せているのである。

何をもって「回復」「再生」と呼ぶのだろうか？　関係性が喪失した場合、元の関係性に戻ることはもはや不可能である。関係的自己は、一旦崩壊し、消失している。他の別の関係を修復していくこと、複数の自己アイデンティティを形成して、使い分けていくこと、また、仮面をかぶって、役割演技に徹することなど、喪失の悲哀に対する対応はさまざまである。例えば、家族における死別や離別においては、友人関係などがバックアップ関係として重要になってくるのである。さらに、再生や回復を考えていくと、私的な関係性から市民社会や公的（パブリック）な関係性へのつながり（絆）こそが重要になってくるものと思われる。しかし、自我と他者関係は、単純にアイデンティティを構築していくばかりとは言えない。戦後日本社会のアイデンティティ論においては、アイデンティティの「迷路」についても見ていく必要があるわけである。

四　アイデンティティの迷路

1　自己―他者の境界の曖昧さ

戦後日本社会のアイデンティティ論を検討してきて、達成的自己と関係的自己、肯定的アイデンティティと否定的アイデンティティの錯綜した関係がさまざまなアイデンティティ論を生み出してきたことが理解できるのである。前稿（拙稿「再帰性と自己決定権―ポストモダンと日本社会―」）において、野口裕二の『アルコホリズムの社会学』（一九九六年）を参考にして、自己というフィクションが、再帰性によって、「いつでも、どこにでもあるアディクションと共依存」を生産―再生産し、それを反復強化するという「自己＝アディクション」という仕掛けについて分析した。

しかし、「自己＝アディクション」という再帰性の構造とともに、そもそも、野口の言う「近代における自己というフィクションは、自己それ自体を神聖化することによって、自己を意味づける外部の絶対的定点を失った。自己を意味づけるのも自己以外にないという文字通り再帰的な空間が出現したのである。[15]」という近代の再帰性は、戦後日本のアイデンティティ論の過程で、微妙に変化しつつあるのではないだろうか。本節では、アイデンティティの「迷路」を複数の視点から多元的に考察してみたい。その第一は、「自己―他者」関係の境界の曖昧さについてである。

再帰的な構造は、自己＝アディクションというような「反復強化」を重要な特性としている。しかし「反復」のもう一つの特性は、「刺激の漸減」という現象でもある。つまり、「自己を意味づける自己像」自体が曖昧になってしまうという効果である。戦後日本のアイデンティティ論は、一九七〇年代、八〇年代、九〇年代、そして二一世紀と近年になるにしたがって、ある意味で「切実なアイデンティティの追求」から遠ざかっていく傾向がはっきり見られる。例えば、「傷つきたくない自己」とか「癒しを求める自己」などは、アイデンティティが「自己―他者」の相互作用の中から作られるという前提自体に対して、ある種の「揺らぎ」が見られるのである。つまり、「関係的自己」の前提となる他者との「相互作用」「相互関係」自体を自己の側から選択的に関係づけた

い、という願望である。そうなると、自己ー他者の境界そのものが曖昧化してしまう。何故ならば、他者認識（自己と異なる他者）を経ないで、つまり、他者とかかわることなしに、自己に閉じこもることによって、自己を追求しようとすると、他者の中にすっぽり自己が入ってしまうような「癒し」さえ、アイデンティティの名で追求されることになるからである。

この現象は、明らかにアイデンティティの迷路である。自己と他者の境界が曖昧になってしまうと、自己同一性は、他者同一性（自分と同じ他者を探そうとする）とも重なってしまって、ますます迷路に入ってしまう。しかし、アイデンティティが重層化していくことによって、自己像と他者像が交錯していくポストコロニアル時代の特徴が現れているようにも考えられる。つまり、西欧的、欧米的自我とは異なるアイデンティティとしてのアジア的アイデンティティなども現れてきているのかもしれない。自我とアイデンティティの確立を自明なものとした西欧的アイデンティティ論とは異なり、他者との相互依存を前提としたアジア的アイデンティティは、決して「アディクションや共依存」という病的な関係に陥るとは限らないのではないだろうか。

2　多重的自己と自己選択の複数性

達成的自己においては、肯定的アイデンティティにしろ、否定的アイデンティティにしろ、自己像は焦点を結びやすいものと考えられる。「こうなりたい自己」「こうはなりたくない自己」という自己イメージである。しかし、関係的自己の場合は、他者との関係性において、自己が変容していくことを前提として自己のアイデンティティがつくられていくことになる。したがって、多重的自己や多層的自己は、病的な多重人格という形態ではなくても、一般的なアイデンティティの追求の中で普通に見られる現象となってくるのである。例えば、心に重たい問題を抱えていたり、気軽に言えない問題などを持っていると、表面の自己と内面の自己を使い分けながら、

多重的自己、多層的自己を構築していく傾向が見られるものと思われる。現代社会においては、役割や地位の多層的な構成や場面に応じた対応が迫られていることも多い。

アイデンティティ（自己同一性）とは、自己選択の対象となるものであろうか？　確かに関係的自己においては、多重的自己や多層的自己が存在しており、それらの中から、さまざまな場面に応じて自己選択をしているように考えられる。しかし、アイデンティティとは、自己が何者であるかの「存在証明」でもあるわけで、ある面ではシティズンシップ（市民権）とも関連をしている。つまり、国籍（ナショナリティ）、エスニシティ、ジェンダー、セクシュアリティ、ジェネレーション（世代・年齢）などのある側面は、アイデンティティとも重なってくるわけである。[16] 例えば、移民や外国人のケースのおいては、一世、二世、三世などの世代によって、ナショナリティやエスニシティの自己選択が異なってくるということも考えられる。グローバリゼーションが進行している今日、国際的な移動や移民は日常化した現象である。したがって、アイデンティティ形成の時期における、言語や家族関係、学校教育や仲間集団など複雑な要素によってアイデンティティに対して複数の自己選択が可能である場合も出てくるのである。

しかし逆に、複数の自己選択は、結局のところ「アイデンティティ」を不明確にする要素も備わっている。何が「本当の自分」であるのか、「使い分ける自己」に対する嫌悪感なども生じてくる。自己のアイデンティティを確立したいという欲求と複数の自己アイデンティティを保っていたいという欲求との間に、二律背反的な状態が生じてくるわけである。このような葛藤は、アイデンティティの迷路の中で、行きつ戻りつしてしまうわけである。戦後日本社会において、社会意識や価値意識が多元化し、目標が複数化、多様化してくる一九七〇年代あたりから、このような自己決定の先送りやアイデンティティの不明確が家族、教育、犯罪などの諸局面において顕在化してきている。「モラトリアム現象」や校内暴力、家庭内暴力、いじめ、引きこもり、凶悪犯罪の低年齢

化など、もちろん個々の要因を分析しないで一括して論じることには無理があるが、ある程度は青年期のアイデンティティ問題とも関連した社会問題であったと言えるのではないだろうか。一九七〇年代以降の現代社会のもう一つの特徴は明らかに「情報化社会」である。この、知識・情報とアイデンティティとの関係についても次に考えてみたい。

3　知識・情報と意欲・関心

ダニエル・ベルによる「脱産業化社会の到来」以来、工業化段階の後の社会の基本的資源として「知識・情報」の価値がますます高まってきたが、近年のインターネット、電子メールや携帯電話、携帯メールなどの普及によって、よりスピードアップされた情報のやり取りが実現されている。こうしたインターネット社会におけるアイデンティティの問題を考察してみたい。

知識・情報の基本的な性格として、第一に送り手から受け手へのコミュニケーションの流れとしてのフローの性格を有している。この面では、情報は基本的には「関係的自己」のアイデンティティに関連している。電話やメールは、パーソナルメディアであるが情報化社会におけるパーソナルメディアの進展は、情報の速度や頻度に関連して関係性の変化に影響を与えているものと思われる。しかし、メディアへの依存度や頻度が多くなるにしても、関係的自己のアイデンティティそのものは、その関係性の質によって影響を受けるものと思われる。速度や量や頻度の問題は、脱産業社会においても、基本的には「産業や経済」の問題である。

それに対して、知識・情報の第二の性格として、獲得的自己や達成的自己に関連したストックの側面が考えられる。インターネットなどによって得られる情報や知識は、確かに瞬時に獲得され、自分のものとして確保されるような「錯覚」が生じやすい。その面ではパーソナル・コンピューターの位置づけは、確かに自己実現や自己

達成感に対して大きな影響を与えていると言える。一般的にパソコンの画面とキーボードだけの世界で操作していることからくる「全能感」とか「全能意識」と呼ばれる自己達成感は、マクルーハンがかつて「人間の拡張」と呼んだ人間の感覚能力や運動能力の外化や拡張の極限的な形態と考えられなくもない。しかし、アイデンティティの問題は、単に外から入ってくる知識・情報の量とそのストックだけにかかわっているわけではない。それが、知識・情報と対になっている「意欲・関心」の問題である。

旧来型のメディアである、書物・書籍・出版物・活字文化には、単なる「知識・情報」の側面とは異なった内側から「意欲・関心」を支えるような装置が働いているともいえる。達成的自己における「読書」の位置づけは、おそらくパソコンの達成感とは異なったものなのではないだろうか。さらに、知識・情報と意欲・関心は、相互補完的ではあるが自己のアイデンティティと関連しているのは、やはり「意欲・関心」の方であろうと思われる。つまり、意欲や関心がないと知識や情報ばかり持っていても、自分の身につかないということである。逆に、意欲や関心はあっても、知識や情報が不足すると「思い違い」や「空回り」を起こすが、その面では「リテラシー（識字率）」の上昇によって、達成的自己、獲得的自己へとつながっていくことが可能である。このように考えていくと、アイデンティティの「迷路」とは、必ずしも情報化社会の進展に伴う知識・情報の氾濫やインターネットなどの電子情報媒体による自己像の錯綜といった様相ではなくて、もっと、自己の内面的な意欲や関心、知識のストックの問題ではないだろうか、と思われるのである。

五　重層的アイデンティティと社会的属性

1　エスニシティ・ジェンダー・年齢の重層性

今までは現代社会における「アイデンティティの迷路」について述べてきたが、本章では、現代社会においてある意味で前提となってきている「重層的アイデンティティ」を社会的属性の面から再考察していきたい。重層的アイデンティティと社会的属性との関係は、「選べる関係」と「選べない関係」とのさまざまな組み合わせによって構築されていくものと考えられる。[17] 例えば、エスニシティ・ジェンダー・年齢という社会的属性は、一般的には「選べない関係」であると考えられる。血縁、地縁、生物的・身体的特徴などは、本人の自己選択の対象ではなく、生まれながらにして「決められている」要素が強い属性である。しかし、このようなエスニシティやジェンダーにこそ、社会的構築の要素が強く働いており、アイデンティティには多様な構築の要素や重層的な構築が可能である。

エスニシティの構築性は、移民家族の二世、三世、四世など、それぞれの世代によって変わってくることはよく知られている事実である。また、国際結婚や混血の子どもたち、あるいは幼児期、学齢期に海外経験の長い、いわゆる「帰国子女」のアイデンティティも重層的に構築されていく。ジェンダーについては、いわゆる「女らしさ」「男らしさ」として「振り幅」を有している。このような基本的には「選べない関係」と、私たちは、どのようにつきあい、どのようにアイデンティティを構築していくのであろうか？

おそらく、「選べない関係」とアイデンティティとの関係は、否定的アイデンティティとの「葛藤」を孕みながらも、「選びなおし」の儀礼を通して、エスニック・アイデンティティやジェンダー・アイデンティティを獲得していく過程が見られるのではないだろうか。もちろん、エスニック・アイデンティティもジェンダー・アイデンティティも社会的に構築されていくものである。「伝統」や「生物学的なもの」という「本質」がそこに存在しているわけではない。しかし、社会的・文化的・時代的、そして個人的に「振り幅」を持ったものではあるが、何らかの「選べない関係」を意識しながら、肯定したり拒否したり「選び直し」を試みたりしながら、個人

のアイデンティティに深くかかわってくるものと考えられる。

それに対して、年齢・世代というファクターは、今、現在の時点では同様に「選べない関係」である側面もあるが、人間に平等に与えられている「時間」によって、いつかは「年を経る」という面も存在している。したがって、加齢に伴ったエイジ・アイデンティティは当然、変化していくものである。エリクソンが述べたように、青年期にアイデンティティの確立が課題になるように、中年期には中年期の課題もあるし、老年期にもそれ相応の課題が存在している。

エスニシティやジェンダーは社会的属性としてはカテゴリー変数であるが、年齢は数量変数である。しかし、世代となると五年か一〇年を束ねてある程度はカテゴリー化されうる。このような変数が一個人の中でも、重層的に構築されていくわけであるから、アイデンティティの重層性は複雑な様相を呈するわけである。

2　職業・労働・家族・地域の重層性

個人の教育歴（学歴）や職業については、社会学的には獲得的地位とか達成的資源として扱われてきた。前述したとおり、戦後日本社会の前半期（一九七〇年以前）においては、高度経済成長期でもあり、このような獲得的自己実現こそが「成長の物語」とともに、信じられていたと言える。もちろん、学歴や職業・労働、あるいは配偶者や住む地域などについて、現在でも「選べる関係」の側面が強い。そして、選択可能であるからこそ獲得的自己におけるアイデンティティと深くかかわっているわけである。

しかし、一九七〇年代以降、日本社会全体として「成長の物語」が終焉し、自己達成や自己実現が必ずしも保障されているわけではない、という状態である。そこで、学歴や職業や夫婦家族、居住地域などの選択可能なアイデンティティの対象については、選択肢の多様性や人生における何度かのチャンス（機会）の保障、そしてア

イデンティティ（自己の存在証明）につながっていると言うよりは、ライフスタイルと結びついた多様な「生き方」が求められているのではないだろうか。例えば、職業・労働についても終身雇用型の企業への就職から転職、フリーターの生き方もあり得るし、結婚、未婚、非婚についても、またＤＩＮＫｓ型、核家族型、さらに、都心居住や郊外居住など多様なライフスタイルの選択が今では可能となっているように思われる。

その意味で自己選択は、アイデンティティの組み換えや変換、多様な「使い分け」にもつながっている面もある。従来のように、家族や職場、地域社会（コミュニティ）などの小集団や中間集団の機能が衰退している状況下では、このようなアイデンティティの変換を乗り越えられるだけの同一性が保持できるかどうかは、かなり疑問になってきている。従来から、家族の移行期や職業生活の変化を受け止める中間集団としての「社会」の存在は、日本社会の社会構造の特徴として指摘されてきた。しかし、都市化、情報化、個人化、グローバリゼーションなどの社会変動を通して、剝き出しの「個人」がこのような社会変動に立ち向かっていかないといけないような状態を生み出しているのである。

したがって職業・労働生活においても、家族生活においても、地域社会生活においてもアイデンティティは揺らいでおり、多層的、多重的なものになってきていると言うことができる。「選べる関係」だからこそ、自己選択や自己決定には「責任」が伴っている。達成的自己においても、関係的自己においても、選択の結果に対する「自己責任」は重要なアイデンティティとなってくるものである。既存の関係性や小集団、中間集団に対しては、確かに機能縮小や機能不全が指摘されている。例えば、地域社会（コミュニティ）は今までと同様の「町内会」や近隣関係だけでは、おそらく維持できなくなってきている。都市的な関係性の中で、情報ネットワークや行政、ＮＰＯ、福祉ヴォランティアなどさまざまな団体や活動が有機的に結びつくことによって、地域社会のサポート機能がよりよく発揮されてくるのではないだろうか。家族集団も「親子関係」などにおいては「選べない関係」

も存在しており、社会的な拒否の関係や「選び直し」もありえることになっている。離婚、再婚家族などのアイデンティティも注目されるところである。

3　国家・環境・グローバルの重層性

今まで、エスニシティ・ジェンダー・年齢などの社会的諸属性とアイデンティティについて、さらに、職業・労働・家族・地域などの諸属性と重層的アイデンティティについて検討してきた。これらは、「選べない関係」にしろ、「選べる関係」にしろ、いずれも個人の社会的属性に関する諸特徴である。標準化されたサーベイ調査を行うとした場合には、いわば「フェイスシート」にあたる部分の質問項目に含まれている。

このような個人の社会的属性に関する部分が、現代社会においては重層的アイデンティティを構築していく要素であることについて解説してきたが、ここでは、個人の社会的属性の部分ではなく、「個人の属性」を支えている社会的部分の変動について考えてみたい。つまり、国家であるとか地球環境であるとか、今まで、個人のアイデンティティを考察する上では「所与」となっていた部分が、変動を経験している、というわけである。国際的な環境の変化の中で、例えば、EU加盟国には、今までのナショナル・アイデンティティとは別に「ヨーロッパ・アイデンティティ」が芽生えつつあるし、「アジア人」「アジア系」「東アジア」などの地域的アイデンティティについても徐々に形成されてきつつあるのかもしれない。

国家の枠組みが相対的に強かった近代においては、社会的属性を基本的に性格付けてきたのは、国家の枠組みであった、と言える。エスニシティにしても、ジェンダーにしても、あるいは家族や地域社会や教育・職業にしても、それらの社会的属性を枠付けてきたのは、国家であったと言えよう。性別役割分業や性差別にしても、人種差別や家族やコミュニティの基本的性格にしても、国家的な影響が大きく作用してきたわけである。

しかしポスト近代、ポスト・コロニアル時代と呼ばれる今日は、脱国家的、脱ナショナリズムの様相は、あらゆる側面に見出すことができる。環境問題やグローバリズムなど評価はさまざまに分かれるところであるが、一つの国家の枠を超えて問題や問題解決に向けての取り組みが広がっていく傾向を示している。このようなグローバリゼーションは、アイデンティティに対してどのような影響を持つのであろうか？

移民のアイデンティティにおいては、ユダヤ人に対してだけではなく最近では「ディアスポラ」[18]という呼び名が一般化しつつあるように思われる。このディアスポラ意識は、世界の中での移動性や離散性に注目して、エスニック・マイノリティをグローバルな視点で見直したときに登場してきたものである。アラブ人意識、イスラム教徒など国家の枠を超えた場合にも見られるが、逆に沖縄系（ウチナー）、スコットランド人、バスク人、カタルーニャ、済州島など国家の中に含まれるローカルなエスニシティの場合にもこのようなディアスポラの意識が生まれている。

このようなグローバル－ローカルの軸とマジョリティ－マイノリティの軸を交差させることによって、アイデンティティの重層的な様相が見えてくるのではないだろうか。先住民族のアイデンティティやエスニック・マイノリティのアイデンティティなどローカルなものから、地球人、エコロジー的価値を備えた人々などグローバルなアイデンティティについても重層的に登場しつつあるように思われるのである。

六　戦後日本社会の市民意識――まとめにかえて――

今まで「戦後日本社会のアイデンティティ論」について、まずアイデンティティ論の登場から見てきた。社会意識の転換点や社会運動の挫折などの契機を通して、アイデンティティの定義や種類と類型を提示した。「関係

的自己」と「達成的自己」、肯定的アイデンティティと否定的アイデンティティの間を揺れ動きながら形成されるアイデンティティについて、次に「自我と他者関係」を中心に検討した。さらに、現代社会における「アイデンティティの迷路」について、「自己＝アディクション」というテーゼを分析していくことから再検討してみた。また、「選べない関係」と「選べる関係」など社会的属性とアイデンティティとの関連についても考察し、重層的アイデンティティに向けての展望を示してきたつもりである。

そこで、まとめにかえて、今後展望していかなければならない課題について最後に考えていきたい。アイデンティティ論は、個人としての「自己実現」「自己追求」を目標としていたが、戦後日本社会が追求してきた「市民社会」との関連で、「市民意識」としてどの程度の自己実現がなされてきたかの判断が必要になってきている。[19] つまり、「知識人と大衆」の問題や市民運動と市民意識との関連、あるいはヴォランティア活動やＮＰＯ、ＮＧＯなどの組織・集団との関係などが次の課題となってこよう。

戦後日本社会は高度成長期のピークを迎えた一九七〇年頃までは、「戦後民主主義」を謳いながら、実際には総力戦体制と変わらない「集団主義」による舵取りを行ってきたのではないか？　という問題提起は、さまざまになされてきた。[20] そうだとすると、戦争の影を引きずった戦後復興期から、「市民社会」という個人の自発性や個人の価値観を第一に考える社会意識へと本当に変わってきたのだろうか？　変わってきたとしたら、オイル・ショック以後、どのような市民意識の変化があったのだろうか？　そして、今、ＮＰＯなどによって担われつつある「新たな公共性」とは、今までの公共性＝国、行政、自治体という図式をどこまで打ち破ることができるのだろうか？

アイデンティティ論を再検討した後に、このような課題に対しても再検討していかなければならないだろう。例えば、戦後派知識人と呼ばれる『思想の科学』グループや大衆社会論・大衆文化論の再検討、小田実などを中

心とした「ベ平連」（「ベトナムに平和を」市民連合）の運動や公害反対の住民運動、一九六〇年代後半からの革新自治体や学生運動、労働組合運動などを比較検討していかなければならないだろうと思われる。

あるいは、戦争の記憶や戦後の追悼と市民意識とも相互に関連している。広島・長崎の被爆者と原水爆禁止や反核兵器の運動なども重要な戦後日本の市民意識に関係している。戦争についての記憶や語りや物語は、個人のアイデンティティや喪失体験などにかかわっているだけではなくて、おそらく戦後日本人全体の集団的記憶や贖罪や罪責などとも関係している。戦後ドイツにおいて、今でもナチズムへの協力やホロコーストへの断罪を探索し続けている姿勢と比較したときに見えてくるものがあるのではないだろうか。今後は、このような点についても考察していきたい。

（1）有末賢「現代社会と社会学の『知の困難』」『三色旗』（慶應義塾大学通信教育部）第六二二号、二〇〇〇年一月、四頁。

（2）有末賢「戦後日本社会の価値意識の変化――余暇と自己実現を中心に――」『法学研究』第六七巻第一二号、一九九四年一二月、五五－八八頁。

（3）有末賢「再帰性と自己決定権――ポストモダンと日本社会――」田中宏・大石裕編『政治・社会理論のフロンティア（慶應義塾大学法学部政治学科開設百年記念出版）』所収、慶應義塾大学出版会、一九九八年、二五一－二八三頁。

（4）同右、二七四頁。

（5）見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂、一九八八年、の「アイデンティティ」の項目では「変わることの保たれる斉一性、連続性の部分がアイデンティティ（同一性）の機軸である。」（栗原彬執筆）と記述されている。森岡清美・塩原勉・本間康平［編集代表］『新社会学辞典』有斐閣、一九九三年、においては、「自我によって統合されたパーソナリティが社会および文化とどのように相互に作用し合っているのかを説明する言葉。」（草津攻執

筆）とある。濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編『社会学小辞典【新版】』有斐閣、一九九七年、によると、「エリクソンの中心概念の一つ。同一性または自己同一性と訳される場合が多い。客観的には人格（ときには集団や共同体）の統合性と一貫性を示す概念。主観的には自分がほかならぬ自分であるという確信ないし感覚をいうが、それは同時に、自分の不変性と連続性を周囲の他者も認めているという確信・感覚に裏づけられている。」となっている。また、『社会学小辞典【新版】』には、「アイデンティティ拡散」「アイデンティティ危機」「アイデンティティ形成」とさらに項目が続いている。一方、それに対して福武直・日高六郎・高橋徹編『社会学辞典』有斐閣、一九五八年、においては、「アイデンティティ」の項目は存在していない。エリクソンの著作の翻訳以後であるからだが、戦後日本社会のアイデンティティ論を考える上で興味深い事実である。

(6) N・アバークロンビー／S・ヒル／B・S・ターナー（丸山哲央監訳・編集）『新しい世紀の社会学中辞典』ミネルヴァ書房、一九九六年（Nicolas Abercrombie, Stephen Hill and Bryan S. Turner, *The Penguin Dictionary of Sociology*, Penguin Books Ltd, London, 1984, 1988, 1994）には、'Identity' の項目はなかったが、一九九九年版の最新の『ペンギン社会学辞典』には、'Identity' が登場している。また、R・ブードン、P・ベナール、M・シェルカウイ、B-P・レイキュイエール編（訳者代表　宮島喬、杉山光信、梶田孝道、富永茂樹）『ラルース社会学事典』弘文堂、一九九七年（R. Boudon, P. Besnard, M. Cherkaoui, B-P. Lecuyer, *Dictionnaire de la sociologie Larousse*, 1993）においては、単一の 'identite' の項目はないが、集合的アイデンティティ［仏：identite collective］という項目は存在している。

(7) 有末賢「戦後日本社会の価値意識の変化」前掲、六一―六二頁、「図4心の豊かさか、物の豊かさか」参照。

(8) 自己否定の契機を通して、歴史や社会の全体像に迫っていくという方法論は、色川大吉『ある昭和史』中央公論社、一九七五年、同『歴史の方法』大和書房、一九七七年、などを参照。

(9) 片桐雅隆『自己と「語り」の社会学』世界思想社、二〇〇〇年、六六頁。

(10) 同右、六六頁。

(11) 数土直紀『理解できない他者と理解されない自己』勁草書房、二〇〇一年。

(12) 浅野智彦『自己への物語論的接近――家族療法から社会学へ――』勁草書房、二〇〇一年。

(13) 片桐雅隆『過去と記憶の社会学――自己論からの展開――』世界思想社、二〇〇三年。
(14) 西原和久『自己と社会――現象学の社会理論と〈発生社会学〉――』新泉社、二〇〇三年。
(15) 野口祐二『アルコホリズムの社会学――アディクションと近代――』日本評論社、一九九六年、一八六頁。
(16) Engin F. Isin and Patricia K. Wood, *Citizenship and Identity*, SAGE Publications, 1999. によると、近代的なシティズンシップ（市民権）が政治的、社会的権利として「市民革命」によって、獲得されてきた性格があるのに対して、近年のディアスポラ的、あるいは先住民族的なシティズンシップやセクシュアル・シティズンシップ、文化的シティズンシップなどのラディカルなシティズンシップの主張は、社会的属性に基づいたアイデンティティに源を発している、と説いている。
(17) 有末賢「再帰性と自己決定権」前掲、の注(17)でも述べたように、「選べる関係」と「選べない関係」については、上野千鶴子「祭りと共同体」井上俊編『地域文化の社会学』所収、世界思想社、一九八四年、四六―七八頁、参照。
(18) 戴エイカ『多文化主義とディアスポラ』明石書店、一九九九年。宮永國子編著『グローバル化とアイデンティティ・クライシス』明石書店、二〇〇二年、など参照。
(19) 慶應義塾大学二一世紀ＣＯＥプログラム「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成―多文化世界における市民意識の動態―」（拠点リーダー：小林良彰教授）のＩ．市民意識日本分析ユニットの中の「Ｉ―２．戦後市民意識研究サブユニット」（萩原能久教授と有末など）において、今後、この課題を追求していく予定である。
(20) 山之内靖・ヴィクター・コシュマン・成田龍一編『総力戦と現代化』柏書房、一九九六年。酒井直樹・ブレット・ド・バリー・伊豫谷登士翁編『ナショナリズムの脱構築』柏書房、一九九六年、および、中野敏男『大塚久雄と丸山眞男――動員、主体、戦争責任――』青土社、二〇〇一年などを参照。